

今の苦勞を喜びに変えて

節にこもる親心を求め おたすけに繋げよう



神殿からの帰り道。心のほこりを払い、親心を感じられるように。

真朋

発行所
天理教芦津大教会
〒546-0003
大阪市東住吉区
今川8丁目6番32号
電話 06 (6702) 1980
FAX 06 (6700) 1854
Eメール shinmei@ashitsu.or.jp
印刷所 天理時報社

これ先は長いが楽しみ。どれだけの自由と言えど、短い楽しみの真の楽しみになるまい。さあこれからたんのうと言う。

明治24年12月18日

『稿本天理教教祖伝』を拝読させていただくと、どんな御苦勞の中でも明るくお通りになられた、教祖のひながたを学ぶことができます。

しかし、教祖をお慕いし、ひながたを頼りに通っていても、喜べる日ばかりではありません。例えば、生命にかかわるような病気や、大きな事情に巻き込まれて、「信仰しているのに、どうして？」と思うときもあるでしょう。つらさや悩みで氣力をなくしてしまう日も、自分の無力さに涙を流す日もあるでしょう。

それでも長く信仰を続けていれば、「あのときはつらかったけれど、ありがたい」と、心から思える日がやってくる。そして、「自分がつらい経験をしたらからこそ、誰かの悩みや苦しみに寄り添うことができる」と実感する。今の苦勞を喜びに変えることができる、それは先々でのおたすけの種となるでしょう。

そのためには、まず自分の心を見つめ、ほこりを払い、心を低くする。そうすれば、「陽気ぐらしをさせてやりたい」という親神様の親心を感じることができ、心に喜びや力が湧いてきます。その節は「生き節」となり、やがておたすけに繋がるのです。

正面四方

長崎市のある集落では、山あいにも暮らす約30世帯の住民が年に一度、まんじゅうを配り合う。江戸時代、この土地で土砂崩

れが起こり、住民33人が犠牲になった歴史を後世に伝え継ぐため、160年以上続けている。「あれ、なぜこんなことをしているのだろう」と思い起こさせることで、被災の記憶が風化しないようにしているのだそうだ。そのおかげか、39年前の長崎大水害でもここでの死傷者はゼロだった。

日本には多様な災害伝承が各地に残っている。50年ごとに供養碑を新たに作れとの言い伝えや、洪水の高さがわかるように置かれた地蔵。全ては、子孫が同じ不幸に遭わないよう、教訓を長く残したいとの思いからだ。

私たちの先人たちも、子孫の陽気ぐらしを夢見てこの道を伝え繋いでくれたに違いない。講名拝戴140周年、次は私たちが繋ぐときである。(山)

《9月次祭 挨拶》

今の苦勞は先の楽しみに

大教会長 井筒梅夫

皆様方には、日頃は時旬の御用の上に真心を尽くしてご丹精いただき、誠にありがとうございます。

私たちは陽氣ぐらしを目標に信仰しています。

おさしづに、

何よ楽しみ無しに、何働けようか。働く者あるか。

明治33年10月21日

楽しみという理を抑えば道が遅なる。

明治26年4月14日

とありますように、陽氣ぐらしをするためには、道を楽しんで通ることが大切です。

『逸話篇』の「雪の日」というお話の中に、増井りん先生が猛吹雪の中を欄干のない橋の上に這いつくばり、「なむてんりわうのみこと」と唱えながら渡りきられ、お屋敷に帰られた様子が描かれています。りん先生がお屋敷へ辿り着いた折に教祖は、

「ようこそ帰って来たなあ。親神が手を引いて連れて帰ったのやで。あちらにてもこちらにても滑って、難儀やったなあ。その中にて喜んでいたなあ。さあ、親神が十分々々受け取るで。どんな事も皆受け取る。守護するで。楽しめ、楽しめ、楽しめ。」

『稿本天理教教祖逸話篇』44「雪の日」

とお労いくださっています。これは、難儀な中をよく喜んで通っ

てくれた。これを十分に受け取っているから、これから先の御守護を楽しめと、先の道を楽しめと、仰せになっているお言葉です。この楽しみについて、おさしづに、

目の前の楽しみ、その楽しみは短い。先の楽しみ、細い道のようだけれども、先の長い楽しみ。後で見れば、短い。先は長い楽しみの道。よう思やんして、真実の楽しみ。

明治20年7月14日

とあります。目の前にある楽しみは、ほんの短いもの。今は細道であっても、その先にある長い楽しみこそが、真実の楽しみであると仰せられています。また、

難しい中という処も通り来たる処、深く楽しみいつまでどれだけどうと思う。難儀さそう不自由さそうという親があらうまい。何か外なる心持たず。これから先長いいつまで楽しみ。

明治23年12月15日

とあります。これは、道を通る中には難しい局面に出くわすことが度々ありますが、こうしたことは先の長い楽しみを御守護するための親心である、という意味です。

教祖のひながたは、前半は貧の御苦勞の道へと落ち切っていたかれた尽くしの世界、伏せ込みの世界であり、後半はをびや許しを道明けに御守護が次々に現れてきた与えの世界であります。教祖は、ひながたの全体像を通して、道の苦勞の後には御守護がある、尽くしの世界の後には、与えの世界があるのだということを示してくださっているのです。

しかも、こかん様が「お母さん、もう、お米はありません」と仰られた貧のどん底の道中にあっても、

水を飲めば水の味がする。親神様が結構にお与え下されてある。

『稿本天理教教祖伝』 40 頁

と子たちを励まされたように、ここには少しの暗さありません。明るく前向きな御態度があるばかりです。節の中にこもる親神様の御守護と親心を悟って喜びを見つけることが、先の楽しみの道に繋がっていくことを、このひながたから学ばせていただけていると思います。

私たちは、目の前に楽しいことがあれば飛びつきたくなります。しかし、目の前の楽しみばかり追い求めてしまうと、楽しいことはするが、楽しくなければやらないという考えになってしまいます。私たちが求める楽しみは目の前のそれではなく、先の長い楽しみを心待ちにして、たとえ細道であろうが、苦労の最中であろうが、そこに喜びを見つけて通らせていただく。そしてその先に頂ける御守護を楽しむことが、道を楽しむことだと思っています。

現在は、新型コロナウイルスの感染拡大という、世界に大きな事情をお見せいただいております。これも先の御守護を頂くための、今通らなければならぬ苦労の道ではないかと思っています。このコロナ禍も、先の楽しみのためにあると考えれば、親心を感じることが出来ます。この親心にお応えするには、終息に向けて時が過ぎゆくのをただ漫然と眺めるのではなく、コロナ禍を通して促される親神様の思召を我が事と悟り、さんげをし、心を定めて、教祖のようぶくとして勇んで働かせていただくことです。

コロナ禍という大きな節は、世界中が心を切り替えて再出発する節だと思えます。ようぶくは自己中心の心からたすけ一条の心に切り替えるときです。まずは教祖の教えを信奉するお互いが、

コロナ禍という大きな事情をもってまで可愛い子どもの成人を促してくださる親神様の親心に、しっかりと応えさせていただきたいと思えます。

また、コロナ禍と立て合い、私たちは眞明組講名拝戴140周年という句を迎えています。この句を「感謝と報恩」の心で通ろうと示し合っています。来月23日は、今年の動きの芯である眞明組講名拝戴140周年記念秋季大祭を、内統領・宮森与一郎先生のご巡教を頂いて執行いたします。翌24日は同記念おぢば帰りを実施いたします。

一つ種を蒔く。旬々の理を見て蒔けば皆実がのる。

明治22年7月31日

先の実りを楽しみに、お互いに秋の大祭を目標に、仕切つておたすけと丹精に真心を尽くし、御恩報じの精神でおぢばに真実を伏せ込ませていただきたいと存じます。

講名拝戴から140年、初代や先人は、たすけ一条に真実の限りを尽くし伏せ込まれ、今日へと道を繋いでくださいました。そのおかげで私たちは、今この道を歩ませていただいているのです。そしてこの道を、陽気ぐらしを目指して次の世代に繋いでいくことが、今道を通る私たちの責任です。

今はコロナ禍という大きな節の渦中にあります。しかし、親神様の御守護があります。教祖の教導があります。そして、初代や先人が遺してくださった理と徳があります。私たちのこの信仰で、コロナ禍という大節を乗り越えて、次の世代に楽しみの道をしっかりと繋がせていただきますように。

本日の月次祭、大変ご苦勞様でございました。

(要約)

《9月月次祭 神殿講話》

教理を身に付け

世界たすけに

役員 瀧本眞二郎

大教会への伏せ込み

大教会前会長様より「兵庫眞洲分教会を復興せよ」とのご命を頂いてから41年、半年前の3月、息子にその任を委ねてようやく任務完了に至りました。

昨年12月、70歳の誕生日を迎え、おかげさまでまだまだ元気であります。会長を譲った後、これから何をしようかと、あれこれ夢と希望に満ちた将来設計をしていました。世間では、70歳も過ぎればあとは余生と言われて将来も何もないわけですが、ある人の言葉を借りれば、余生などと言って私に余った人生などなく、この身をお返しするその瞬間まで、人生本番であります。

ようぼくである限り、それは他でもなく御存命の教祖をお慕い申し、教祖の親心にお縋りしながら日々を歩ませていただくということです。

そうしたい思いでワクワクしておりましたところ、大教会長様から大教会に入り込んでほしいとのお話を頂きました。少なからず悩みましたが、そのお話を頂いて、ふと思いました。

私の兄は10年前の7月26日に70歳の誕生日を迎え、半月後に出直しました。私の父は63歳で出直しておりますが、兄は出直す直前、「父より少し長生きできてよかった」と言っていたそうです。それを感じ出して、これは命を下さるんだと悟らせていただきました。

それなら大教会で夢と希望に満ちたようぼく人生を歩ませていただく、となった次第です。

教会復興という任務は完了しましたが、前会長様からお育ていただいたご恩、また現会長様からおかいたたく親心にお応えするのは、教会復興とは別の話であります。大教会長様の仰るように、大教会に伏せ込ませていただくことによって、少しでもそれに代えさせていただけるならとお受けいたしました。

眞明芦津の道の頂点でもある大教会というステージで、一層の成人の道へと歩みを進め、更なる寛容とたんのうの精神を養い、それらを発信する手立てを磨かせていただきたいと、願ってやまないわけです。

宗教者に求めること

人類の危機にも等しい、緊急事態の続く世の中にあつて、世間の人々がわれわれ宗教者に求めることがあるとすれば、寛容と忍耐とそれぞれの教えが持つ宗教的知性

だと思えてなりません。

申し上げるまでもなく、寛容とは相手を許すことであり、忍耐とはたんのうであり、自らの心を治めることです。

そして宗教的知性とは、例えばキリスト教ならキリスト教の、仏教なら釈迦の教える法と生きるための知恵でありましょう。

そして天理教のようぼくであれば、教祖から教えていただいた陽気ぐらしへの日々を支える誠真実と、そこから溢れる人を思いやる心遣いであると思うのです。

おふでさきは1千711首の最後に、これをはなれつ心しやんたのむで

十七号 75

と締めくくられています。思案せよ、考えよと仰る。これが天理教の陽気ぐらしへ向かうための知性の原点です。

陰暦と陽暦

今からお話しする内容は、昨年8月の『眞明』の四方正面に書かせていただいた話ですが、この機会にきちんと説明をさせていただきます。

きたいと思っています。

昨年春頃ですが、ある大教会の役員さんから次のような話がありました。

「古い話ではあるけれど、日本が暦を陰暦から陽暦に変えたのは明治の初め頃だった。しかし、本教としては陰暦のまま祭儀が勤められ、本席・飯降伊蔵先生が出直されて2年半後、明治43年にやっと陽暦に合わせるようになった。

なぜ40年近くも陰暦のまま勤められたかという、教祖御在世の頃は分らないが、教祖が現身を隠されて後、本席様がどうやらお許しにならなかったらしい」との

ことでした。

これはどこかに記されている話ではなく、その先生がそう仰るのです。それで、明治43年1月26日より、やっと本教も陽暦に変えて勤めるようになったということです。

さらに続けて、「なぜ本席様がお許しにならなかったかという、どうやらお月さんとお日さんに関係があるらしい。なので、お日さんはさておき、なぜお月さんに関係があるのかを調べてほしい」と、こんな話でした。

本席様は陰暦にこだわられたということでありましょう。

そもそも陰暦とは、月の満ち欠けを中心とした暦の数え方なので、月の動きそのものにこだわられたということなのかなとも思うわけですが、内容が内容なので、大いに興味をそそられ、調べてみようと思ったのです。

申し上げるまでもなく、本教の一番大切な祭儀は、春秋の大祭と月次祭です。そして朝夕を含めたおつとめがわれわれの道の命でも

あります。

そのおつとめが、明治43年までは陰暦のまま勤められた。なので、陰暦26日の月の動きこそが重要であると見て、天体として月の動きを調べ上げました。月の動きは中学の理科で教えられます。

陰暦とは月の満ち欠けを中心として、1日の新月から次の新月まで29・5日を1カと月として換算します。それに対して陽暦は、地球が太陽の周りを回る周期を基にして作られ、地球が太陽の周りを365日かけて1周するのを1年とするのです。

南の空に月日が揃う日

毎月26日のおつとめが始められる時刻は、通常ならば、真柱様を先頭につとめ人衆の先生方が9時に教祖殿で礼拝後、神殿へ参進され、祭儀式に続き、だいたい午前9時40分頃にかぐらづとめが勤められます。

そこで、毎月陰暦26日の午前9時40分頃の月の位置を調べてみました。すると、おちばから南を向

いて、真南を中心に右に月、左に太陽が並ぶことが分かったのです。もちろん日中は、月は見えませんが、見えなくてもそこにあるのです。この月日が南の空に揃うということに、本席様はこだわられたのではないかと、私は推察するのです。

私は、毎月14日にご本部の神殿奉仕当番を勤めておりますが、その先生も同じ14日に当番を勤める仲間です。過去も未来も含めた何十年か分の「陰暦26日の月の位置」を調べた資料を、この先生に差し上げたら、大層喜んでくださいます。同じ日に勤める他の先生方も大いに興味を示してくださり、ある月、当番翌日の15日が陰暦26日だったので、先生方は当番が明けてもおちばから帰らず、翌日のその時刻に南礼拝場に参拝に来ていました。そして銘々おつとめを終えて南の空を眺めると、まぶしい太陽の少し右に、うっすらとお月さんが見えたのです。いい年したじいさんたちが、南礼拝場前の砂利の上で、思わずはしゃいでい



ました。頭上に月日が揃っているのです。

陰暦26日の理合い

私たちは月日親神様と申し上げますが、月と太陽が神様というわけではなく、その働きを指しておられるのは言うまでもありません。この世は一分の隙もない理詰めの世界とお教えいただきます。その世界観を目で見て一番分かるのが、天体としての月と太陽の動きであります。

月はくにとこたちのみこと、目うるおい、水の守護でありますから、地球上のすべての水の動きを支配されています。まず潮汐、つまり海の水の満ち引き、そして人間はじめ一切の生き物、さらに植物に至るまでの体液、水分のこれも満ち引きがあるのです。ですから、体液の高揚する満月や新月の日に交通事故や事件が多いことが、統計的に証明されています。アメリカでは、満月や新月の日にパティーをするなどいわれる所以です。ヨーロッパ各地に伝わる満月

の夜の狼男の伝説もそこからきているといわれます。

また、地球は月のおかげで変わることもない自転を維持でき、45億年前、月ができたとき、太陽を回る公転に対し、地球が23・4度傾いたことで四季ができました。

また、月がなければ地球は一日8時間で自転してしまい、生命が発生する環境ではなくなるそうです。月の存在がどれほど大切かは、言い出せばきりがありません。

半世紀くらい前から、宇宙があって地球ができ、環境が整って生命が発生したという「宇宙原理説」という考え方から、この宇宙を認識させるために人間をつくり、そのために宇宙が動いているという「人間原理説」が台頭し始めているという話があります。

まさに、人間を創るためにこの世をお創りになり、「一尺八寸に成人した時、海山も天地も日月も、漸く区別出来るように、かたまりかけてきた。」(『天理教教典』29頁)との元の理の一節が自ずと浮かんでくるのです。

その月と太陽が南の空にお揃いになる、これほど象徴的なことはないと思います。それが、陰暦26日の理合いです。

教理に親しむ

月の動きに関しては、今では千年後の今日この時刻の月の位置も、千年前のこの時刻の位置も、瞬時に特定できます。

ちなみに、明治20年陰暦正月26日、教祖が現身をお隠し遊ばされた午後2時は、まさにその時刻に月が西の生駒山系の山向こうに隠れた瞬間であります。今で言うなら、西名阪大阪方面行きの香芝サービスエリアを越えたトンネルの山頂から西地平線に隠れた瞬間です。

陰暦から太陽暦へと暦の教え方は変わり、陰暦の26日と違って、今勤められる陽暦の26日では月の位置も変わりましたが、教祖の、皆の心の勇む日が、一番吉日やで。

『稿本天理教教祖伝逸話篇』

173「皆、吉日やで」

とのお言葉通りに受け取らせていただかねばならないと思います。そして、先人先輩方がご苦労された元一日をこうして時に偲ばせていただくことも大切であろうかと思えます。また陰暦の理合いを忘れないことであります。

この陰暦から陽暦に変わったことに関しては、『みちのとも』3月号の中で、本部長・松田理治先生が詳しく解説されているので、興味のある方は、もう一度読み返されたらいいかと思えます。

最後になりますが、世界的パンデミックのこの時節、布教活動もままならず、ましておたすけ活動も時にはばかられる昨今、しっかりと教理に親しみ、改めて教理を身に付けて、心に溜(ため)をもつて来るべき世界にすくすく臨ませていただきたいと願ってやみません。

また『みちのとも』9月号、10月号に掲載されている、本部長・上田嘉太郎先生のかしもの・かりもの。の論文は必見かと思えますので、改めてご紹介し、神殿講話を終えたいと存じます。(要約)

親神様には、陽氣ぐらし世界実現をお望み下さる深い思召から、私共をようばくへとお導き下され、たすけ一条の道をお連れ通り下さいます御慈愛の程は、誠に有難く勿体ない極みでございます。私共は、この親神様の御心にお応えできよう、心の成人に努め、道の御用に励ませて頂いておりますが、その中にも今日の吉日はおちばより当大教会にお許しを頂きました日柄でございますので、只今から役目に与る者一同心を一つに、座りづとめ、陽氣てをどりを勇んで勤めて、九月の月次祭を執り行わせて頂きます。御前には、日頃の御厚恩に御礼申し上げたいと、今日を大切な一日と思ひ定めて参らせて頂きました芦津の道の子達が、たすけ心を湛えてお歌を唱和し、尚も変わらぬ御守護にお縋る状態を御照覧下さいまして、親神様にもお勇み下され、たすけ一条の道の上、よろづたすけのつとめの理をお垂れ下さいますようお願い申し上げます。私共をはじめ、芦津の理に繋がる教会長、ようぼくは、親神様の大いなる御守護にお導き頂いて、たすけ一条の道の上に真実の限りを尽くしてお通り下さった初代や先人の御丹精にお応えできるよう、陽氣ぐらしへの道を、一手一つに心勇んで進ませて頂きたいと存じます。そして、秋の大祭を仕切つて、おたすけに丹精に、ちばへの尽くし伏せ込みに、真心を籠めて努め励まして頂く決心でございます。

何卒一同の誠実を大らかな御心にお受け取り下さいまして、教会長、ようぼくの向かう処に不思議やかな理をお現し下され、時旬に相応しい成人の実を御守護下さいますよう、更には陽氣ふしんの道具衆として心嬉しく働かせて頂きますようお願いの程を、一同と共に慎んで御願ひ申し上げます。

[illegible]

《お知らせ》

新型コロナウイルスの感染状況を鑑みて、
婦人会荻津支部総会は、11月24日（水）
午前10時より、直属のみで勤めます。

ラグビーを通じた人材育成

婦人会母親講座

9月24日、秋季霊祭終了後、
婦人会荻津支部（井筒年子支
部長）は、大教会で「母親講
座」を開催。婦人会員を中心
に19名が参加した。

今回は、天理大学ラグビー
部監督・小松節夫氏（御津大
教会所属）による「ラグビー
を通しての人材育成」の講話
DVDを視聴した。

小松氏は、昨年夏に寮内で
コロナウイルスの集団感染が
出たが、それを乗り越えて大
学日本一に輝いたことに触れ、
「応援してくださる方への感
謝の気持ちを表そうと、部員
たちが寮周辺のゴミ拾いを始
めた。大きなことを成し遂げ
るには、日々の小さな徳積み
が大切」と語られた。また、
「導く側が、ぶれない視点を

持つことが、若い人の可能性
を引き出すことになる」と、
若者を育成する上での角目に
ついて話された。

ちばに真実の伏せ込み

青年会ひのきしん隊
青年会荻津分会（井筒敏成
委員長）は9月6日から11日
まで「おやさとふしん青年会
ひのきしん隊」に入隊した。
ひのきしん隊は、昨年より



神殿南礼拝場そばで足場の設営に励む

神殿南礼拝場
階下での足場
設営や、旧本
芝詰所の解体
作業など、親
里でしか味わ
えないひのき
しんに汗を流
した。

教務部報

神殿屋根葺替願
東俱分教会（當別部属）
遷座祭 10月16日
鎮座祭 11月6日
奉告祭 11月7日
立教184年9月25日お許し戴く。

立教184年9月25日お許し戴く。

教会長資格検定合格

島田 善人（島浜）

立教184年9月16日教会長資格
検定講習会第114回を修了し、
翌17日検定合格されました。

教人資格講習会第114回

小野田駿平（順世）

立教184年9月10日

おさづけの理拝戴《8月》

奥田 陽人（周宝）

岡本 克彦（二名）

菊池 良和（和鎮）

（拝戴順 3名）

初席《8月》

（1名）甲邊・吉野川

（順序運びより 2名）

項 目 名 称 () 内教会数	初 席	の お 理 さ づ け 戴	修 養 科 修 了	教 人
大 教 会 (1)	11	4	2	
東 津 (13)	4	2	2	2
吉 野 (29)	1	2		
島 川 (16)	2	5		
日 原 (15)	2	5		
稗 島 (7)	1	2	2	1
本 津 (2)				
日 高 (2)				
始 良 (5)				
津 和 (12)				1
門 司 (6)				1
當 別 (6)	4	7	6	
大 沖 (26)				
尼 崎 (3)		2		
四 山 (5)			1	1
大 冠 (2)				1
島 下 (1)				
青 保 (1)	1			
芦 浪 (1)		1		
甲 邊 (1)	1	1		
芦 華 (1)				
天 津 (1)				
入 江 (1)				
豊 野 (1)				
紀 周 (3)	3	1		
勝 明 (1)				
神 の 島 (1)				
兵庫眞洲 (1)	1			
芦 ノ 郷 (2)				
本 明 勇 (2)				
明 道 (1)				
芦 東 (1)				
和 鎮 (3)		2		
神 滝 本 (1)				
芦 明 徳 (1)		1		
眞 彰 化 (2)				
本 氣 (2)				
芦 明 照 (1)				
眞 伯 (1)				
合 計 (209)	31	35	13	7

月例統計（自令和3年1月1日～至令和3年8月31日）